

解説シートについて

赤嶺由紀子 高志保美奈

はじめに

壺屋焼物博物館の教育普及活動は、学芸員による展示解説、博物館外での移動展示や体験活動を行う出前こども博物館、夏休み焼物体験教室、学芸員実習生の受け入れ、小・中学校教諭研修の受け入れ、ホームページによる情報の発信などがあげられる。その中でも展示解説は教育活動の基本であり、博物館でなくてはできない。月に1度開催するギャラリートークは常設展を紹介するもので、子供から大人まで様々な年齢層を対象としている。実物もしくはレプリカに触れながら、疑問を学芸員に直に尋ねることができるのが大きな特徴である。利用者からは「わかりやすい」「ためになる」と好評である。ギャラリートークが設定されていない日でも、来館者の要望に応じて常設展示解説を行っており、特に学校が利用する際は、担当教諭との事前の打ち合わせに時間をかけ、子供たちのニーズに応じた内容で対応している。解説を行わず、ワークシートを用いた課題見学をサポートする場合もある。これらは児童生徒が対象となる。館で準備しているワークシートは数種類ある。子供たちはレファレンス室「ゆんたくコーナー」（ゆんたくとは沖縄の方言で「話す」の意）で好きなワークシートを選び、常設展示を自由に回る。放課後や休日の利用も多い。他にも焼物パズルなどの館独自の教育普及グッズを製作しているが、今回は常設展示の内容を補助する解説シートについて報告したい。



ギャラリートークの様子

あかみね ゆきこ：（壺屋焼物博物館 学芸員）
たかしほ みな：（壺屋焼物博物館 教育普及員）

1 解説シート「なるほどなっとく！たのシ〜ト」とは

博物館の醍醐味は、実際にモノ（展示資料）が見られることである。モノにはパネルやキャプション、参考資料などで多面的に情報を得られる工夫がなされている。学芸員やボランティアスタッフによる解説を加えると、モノについての理解がより深まるだろう。しかし、物理的な問題として展示スペースには限りがあり、来館者の疑問や要望に応えられない場合もある。そこで製作したものが焼物について解説している「なるほどなっとく！たのシ〜ト」である。

これは今までの来館者から特に質問が多かった「壺屋焼を作る工程」と「シーサー」について回答する形式となっている。常設展示にも触れられているが、解説シートでは多くの写真や図、イラストを用いて視覚的にも楽しく学べるよう工夫した。現在「上焼の作り方編」「荒焼の作り方編」「シーサー編」の3種類がある。

2 ゆんたくコーナーにおける解説シートの実態

解説シートの利用者は主に、①県内の小学生②県内外の一般来館者があげられる。

①県内の小学生の利用状況

博物館近隣の小学校では、主に総合的な学習の時間や社会科で博物館を見学する。見学後、子どもたちはグループに分かれ壺屋焼に関するテーマを決め、放課後や休みを利用し、情報収集のためゆんたくコーナーを訪れる。上焼・荒焼・シーサーについて調べるグループは多く、解説シートを利用することがよくある。

ゆんたくコーナーで解説シートを提供する際、気をつけている事が1つある。それは子どもたちに解説シートをすぐには提供しないということである。子どもたちは自分たちで決めたテーマに関する情報を自らが発見し、より理解を深めるために来館しているので、まずは館内をじっくり見学し、テーマにあった答えを自分たちで探してもらう。そこで出てきた質問や要望に応じる際に、解説シートを利用している。解説シートは館内で得られる情報をイラストなどでわかりやすく説明し、さらに深い情報がまとめられているので、新たな学習の展開が期待できる。

今回、新しく作成したシーサーの解説シートには、シーサーの制作工程を載せた。ゆんたくコーナーでは、これまでシーサーの制作工程は映像や写真を通して説明していた。もちろんそれでも十分な情報提供にはなるが、解説シートという形で持ち運べることで、学校や家でも復習でき、より良い情報提供の資料といえる。

②県内外の一般来館者利用状況

解説シートは小学生だけでなく、県内の来館者や本土からの観光客の方々への説明にも用いている。特にシーサーに関しては多くの質問があり、解説シートは分かりやすくまとめられた資料として重宝している。沖縄の文化を知る手がかりとなるだろう。

本来ならば全ての来館者に展示解説し、より理解を深めていただくことが望ましいが、展示解説を行っている間はゆんたくコーナーに待機できないこともある。今後の課題として、展示のポイントを押さえて学習でき、壺屋地域も散策できる解説シートを作成し、来館者の要望に対応できるよう心がけたい。

まとめ

「学校教育」と博物館・図書館・公民館などの「社会教育」が一体となった教育活動、即ち学社融合と言われて久しい昨今、当館は試行錯誤を繰り返しながら、博物館のよりよい利用法を模索し続けている。「総合的な学習の時間」が2002年以降に導入されて以来、学校単位での利用や、放課後にやってくる「ゆんたくコーナー」常連の子供たちも増えた。開館して10年、ようやく近隣の小・中学校に親しめる博物館として認識されつつあると感じる。

「ゆとり教育」の見直しが求められる現在「総合的な学習の時間」の削減によって学校との関係がどう変化していくのか懸念がないわけではない。今後の動向をしっかりと見据えながら、教育普及活動のあり方を考えていかなければならないと思う。

【主な参考文献】

『教師のための博物館の効果的利用法』大堀哲 東京堂出版 1997年

『博物館と結ぶ新しい社会か授業づくり』北俊夫 明治図書出版株式会社 2001年

『博物館を考えるⅡ』水藤真 山川出版社 2001年

『博物館の学びをつくりだす』小笠原喜康、チルドレンズ・ミュージアム研究会 株式会社ぎょうせい 2006年



つぼややき ジョーヤチ
壺屋焼の上焼は、どのように
作るのかな？

- ① おんどを作る
- ② 形を作る
- ③ けずる
- ④ おけしようする
- ⑤ かざりをつける
- ⑥ うわ薬をかける
- ⑦ 水やきする
- ⑧ 赤絵
- ⑨ できあがり！



島袋常秀さんに作ってもらいました

① ねんどを作る

ねんどは、山や工事現場などからとってきても、すぐには使えません。何度も水に通して細かいねんどにしていきます。



白土

赤土

上焼は、沖縄本島の中・北部の赤土と白土をつかいます。



こまかくくわいて
ふるいにかけます。



ふるいにかけた土を水に入れ、かきまぜます。底にねばりのある土がたまります。この土を焼物づくりにつかいます。



足でふんでねんどを
ねり、使いやすくしま
す。

写真提供：山田賢氏

現在、ねんど作りは工場の機械で行われるようになりました。



壺屋陶器事業協同組合製土工場の様子

② 形を作る

ロクロ 赤土で形を作ります。



ロクロでカップを
作る様子です。

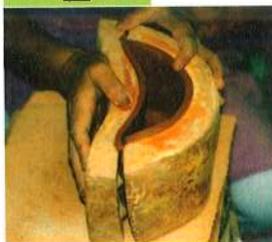
カップを一つ作る
のに、約400グラ
ムのねんどを使い
ました。



足でけて回すロクロだね！

形を作るには、ロクロ以外にもいろいろな方法があります。

型



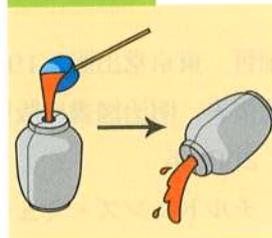
型にねんどを
押しこんで
形を作ります。

タタラ



ねんどの板を
組み合わせて
形を作ります。

いこみ



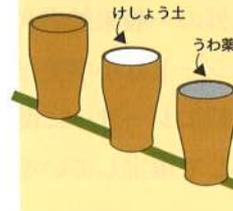
型の中に
ねんどを入れて
形を作ります。

手びねり



型を使わず
最後まで手作りで
作ります。

③ 内がわにけしょう土と うわ薬をかけてから けずる



形ができたら、
少しかんそうさ
せませす。内がわ
にけしょう土を
かけます。さら
にうわ薬をかけ
ます。



さかさまにして、
よぶんなねんどを
けずり、形を
ととのえます。

④ 外がわを おけしようする



ちやぽ

うつわの表に、白
い土をかけること
を「けしょうがけ」
といいます。ま
るで、本当にお
けしようしている
みたいですね！



なぜ、白い土を
かけるのでしょうか？



表は白いけど
切り口の色は...？

上焼を縦に切ってみました。

赤土の上に、そのまま緑や黄色の色をつけても、もようはキレイに出ません。白土の上だと、色の付いたもようがきれいに出来ます。それで、白い土をかけるのです。けしょうがけは、少ない白土を大事に使ってきた陶工（とうこう）たちの知恵なのです。

5 かざりをつける



けしろうがけした白い土が、あるていどかわいたら、もようをつけたり、かざりつけをします。

かざりのつけかた



線ぼり

線をほって、もようをえがいていきます。



かきおとし

表面をけずり落として、もようをえがきます。



イッチン

ドロドロのねんどをスポイトに入れ、しぼりだしながら、もようをえがきます。



タックワサー

やきものの表面にねんどで形を作って立体的にもようをもりつけます。



ねりこみ

色のちがうねんどをねりあわせて、もようを作ります。



絵つけ

ふでで、さまざまなおもようをえがきます。

6 うわ薬をかける



うわ薬をかけます。



うわ薬のやくわり

- ・水もれをふせぐ
- ・やきものを、じょうぶにする
- ・色やかざりをつける

伝統的なうわ薬 方言のよび方



シルグスイ

とうめいです。
(白土の上にかかっています)



クルグスイ

くろい色です。



アカーグワー

ちゃ色です。



オーグスヤー

緑色です。



ゴス

青い色です。

うわ薬は厚さや焼き方によって、色が変化します。

そうか！
壺屋焼って
ひとつひとつ
手作りなんだね。



7 本やきする



かんそうさせ、窯（かま）に入れてやきます。やく温度はおおよそ 1230 度です。
常秀さんには、ガス窯でやいてもらいました。10 時間かけてやきました。

完成です！



完成ですが…!?

8 赤絵



筆でもようをえがいています。

中には、やきあげて完成したせい品の上に、やきもの用の絵の具でもようをえがいて、もう一度やく場合もあります。「上絵つけ」または「赤絵」といいます。

9 完成



もようをかいて… やきました！

おおよそ 800 度で 6 時間かけて、もう一度やきました。「赤絵」とよばれるやきものの完成です。



つばやき アラヤチ
壺屋焼の荒焼は、どのように作るのかな？

- ① ねんどを作る
- ② 形を作る
- ③ けずる
- ④ やく
- ⑤ できあがり！



新垣さんに作ってもらいました

① ねんどを作る

ねんどは、山や工事現場などからとってきて、すぐには使えません。何度も水に通して細かいねんどにしていきます。



荒焼は、沖縄本島の南部の島尻マーヅとジャーガルを、まぜてつかいます。



こまかくくわいてふるいにかけます。



ふるいにかけて土を水に入れ、かきまぜます。底にねばりのある土がたまります。この土を焼物づくりにつかいます。



土を足でふんでねっていきます。

今では、ねんど作りを機械で行っている陶工もいます。



② 形を作る

形を作ります。

ロクロ



ロクロでつぼを作る様子です。



電気でまわすロクロだね！

形を作るには、ロクロの他にもいろいろな方法があります。

手びねり



型を使わず最後まで手作りで作ります。

<製作：石川喜進氏>

ウシチキー



なるほど
なっとく
Tのシート

那覇市立 壺屋焼物博物館

シーサー編

http://www.edu.city.naha.okinawa.jp/tsuboya/



シーサーはいつごろから
作られたんだろう？

シーサーのはじまり

シーサーは15世紀末に中国からもたらされたといわれています。はじめは上層階級の権力を象徴したり、守護するために用いられたようです。

17世紀末から、村落の守護や火災よけとして各地で石獅子が作られ、一般的なひろがりを見せるようになります。



鳥取県八雲郡野高町石獅子 (旧東原平町)

『球陽』によると、1689年に火災よけとして置かれたと記述されています。

シーサーは石獅子からはじまるんだよ。最も古いシーサーは浦添ようどの石棺にあるものだとされているんだ。



壺屋では、いつから焼物のシーサーが作られるようになったんだろう？

瓦葺きの屋根が普及し始める明治のころ、壺屋で荒焼のチブル（頭部）シーサーが現れます。全身像のシーサーは、大正から昭和にかけて作られるようになります。戦後は荒焼に加えて上焼のシーサーも作られるようになりました。シーサーの人気が高まるにつれ、近年はいろいろな表情のシーサーがみられるようになりました。



チブルシーサー

壺屋で作られた荒焼のシーサーです



壺屋で作られた上焼のシーサーです

漆喰と瓦を組み合わせてつくる漆喰シーサーも、焼物のシーサーが普及しはじめる明治のころだといわれているんだ。



漆喰シーサー

シーサーの作り方

荒焼の陶工
石川喜進さんの
シーサー作りを
ご紹介します。



1 胴体を作る

ロクロで体の部分を作ります。シーサーの大きさの基本になります。



2 後ろ足を作る

棒を使って、細長い形の足を作ります。指の部分も作ります。



3 底を作る

型を使って、底の部分を切り抜きます。



4 胴体と底をつける

体と底の部分をくっつけます。



5 後ろ足と胸をつくる

後ろ足を作って安定させて、胸を作ります。



6 前足をつける

胸の下の方に、前足を作ります。



7 口を作る

胸の上は顔になります。まず口をつくり、くずれないように棒をさします。



8 頭を作る

頭を作ります。



9 目を作る

目を作ります。焼くと、白くなる土を使っています。



10 鼻を作る

鼻を作ります。



11 まゆ毛を作る

まゆ毛を作ります。



12 細工する

ヘラで、細かい部分をていねいにかいていきます。



13 まき毛を作る

ねんどを丸めて、まき毛を作ります。



14 しっぽをつける

しっぽをつけます。しっぽの中は空です。



15 耳をつける

目のなめ上に、耳をつけます。



16 口を切り抜く

口の部分を切り抜きます。はく力ができませんでしたね！



17 完成

シーサーができました！窯で焼いて完成です。

「八重山古陶」展 関連文化講座 報告

倉成多郎

那覇市立壺屋焼物博物館では、平成19年7月31日から8月12日まで、企画展「八重山古陶 ～その風趣と気概～」を開催した。2週間の会期で、約1600名の入館者があり、関心の高さが伺えた。

本企画展は、早稲田大学會津八一記念博物館で平成19年6月25日～7月14日に開催されたものが、企画者と早稲田大学、さらには展示作品所蔵者の協力を得て、当館、さらには8月17日から25日まで大濱信泉記念館（石垣市）で実施したものである。

展示内容は、八重山で焼成された施釉陶器を展示の中心すえて構成されている。八重山の施釉陶器については、作られてはいたが技術も質もレベルは低いというのがおおよその認知であった。しかし、本企画展では、近年黒石川窯跡から発掘された施釉陶器片と伝世品とを照合し、八重山で高い技術と品質の焼物が製作されていた可能性を示唆した。また、従来、喜名焼・古我知焼・湧田焼とされていた伝世品についても、黒石川窯跡出土の陶器片との照合結果から、八重山焼として展示をした。企画者の一人、丹尾安典氏が言うとおりの「今回の展示は、八重山の陶器のみならず、沖縄全体の陶器史に再考をうながし、さらには交易、産業史にも問題を提起する契機となりうる」（本展図録）ものであった。当然、当展示には異論も出るであろうことは企画者も当館も予測をしていた。

当館では、この賛否の声があがるであろう展示を契機に、近世窯業史の議論が活発なることを願い、関連文化講座をおこなった。講師には陶芸家であり元沖縄県立芸術大学学長の大嶺實清氏、「八重山古陶」の企画者の一人である石垣市教育委員会文化課の阿利直治氏をお招きした。

次頁以降の文章は、この講座の録画ビデオを当館職員がテープ起こししたものである。いい間違いや、口述独特の繰り返しなどは適宜訂正した。また、音声聞き取れない場合も修正をおこなっている。よって、本文についての責任は全面的に当館が負っている。

講師をお引き受けくださり、また講座内容の紀要掲載についてご了解を賜った、大嶺實清氏、阿利直治氏にあつく御礼を申し上げます。

くらなり たろう：（壺屋焼物博物館 学芸員）